

令和7年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業 実践記録報告書

「地域と共に学ぶ」子供の育成目指して

－地域のホンモノ・ホンキに触れる地域素材の開発－

1 はじめに

(1) 実践の目的

本校は全学年3学級で構成される学校である。これまでの生活科および総合的な学習の時間のカリキュラムは、学年単位で内容構成を図ることが多い。80名から95名程度の大人数での活動が中心となりがちである。そのため、これまでは、子供たちにダイナミックな探究活動を提示できなかつたり、課題を“自分ごと”として捉えて探究できるような単元構成がしにくかつたりする問題点が挙げられてきた。

そこで、地域人材の掘り起こしと教材化を図り、学年単位での活動と学級単位などの少人数での探究活動を融合させられる、生活科と総合的な学習の時間の見直しの機会としたいと考えた。

(2) 内容・方法

目的を達成するために、従来の各学年の総合的な学習の時間の内容を見直す視点を設け(図1)、地域の素材群から、さらに連携や学習の深化の可能性を探り、可能なものの教材化と授業実践を進める中で、カリキュラムの見直しを図りつつ実践を進めた。

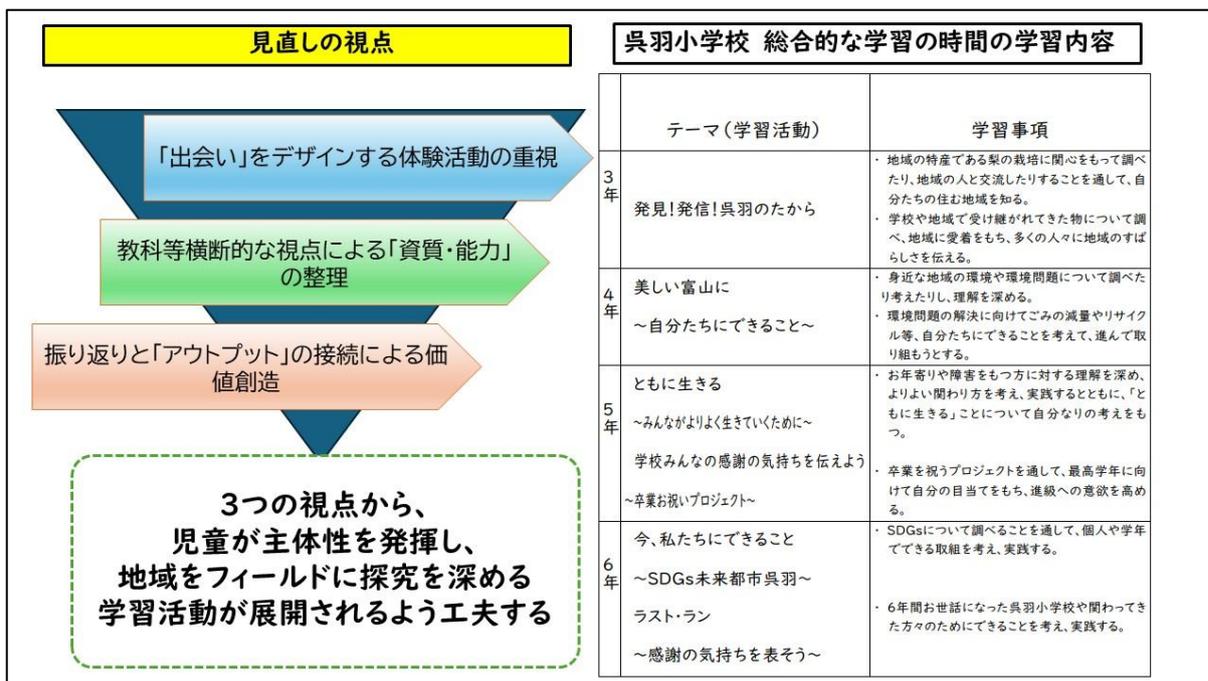


図1 カリキュラム見直しの視点

2 活動の実際

(1) 3年生の取り組み 総合的な学習の時間「呉羽の宝を見つけよう」

3学年は毎年「呉羽の『宝』を見つけよう」と題し、地域の発見活動を総合的な学習の時間のテーマに据えて学習を進めている。今年度は、地域の専門家や企業との連携を強め、子供たちが当事者意識をもって「地域のホンモノ」に触れる活動を目指し単元を構成した。

① 「ホクリクサンショウウオの里親になろう」

富山市ファミリーパークの協力のもと、富山県と石川県の一部にしか生息しない絶滅危惧種ホクリクサンショウウオの飼育に取り組んだ。子供たちは、



ファミリーパークの出前授業



飼育活動に取り組む

飼育員から学んだ「赤虫をピンセットで揺らして生きているように見せる」といった知恵を実践し、交替で2週間の飼育活動を行った。当初は「水が臭い」「フン取りが大変」といった苦労もあったが、「一匹も死なせたくない」という強い責任感が芽生え、粘り強く世話を続ける姿が見られるようになった。この「里親」としての活動は、命を預かることで、当事者意識を育む貴重な機会となった。

② 地元企業との連携による「呉羽梨の栽培体験」

梨栽培に携わる地元企業との連携を図り、4月の交配、5月の摘果、9月の収穫まで年間を通じた体験活動を展開させていただいた。ここでは、単に特産品の梨の生産の工夫や苦労を紹介してもらうだけでなく、子供たちはそれぞれの作業が「おいしい梨を作るための尊い作業」であることを学び、農家の方々へ「仕事のやりがい」について熱心にインタビューを行った。五感を働かせて地域のプロの「ホンキ」に触れることで、単なる知識の習得を超えた深い学びを実現することができた。



梨の交配体験

これらの実践を通じ、地域社会との対話から課題を発見・解決する力が確実に育まれてきたと言える。

(2) 4年生の取組「Never give up!! ～自分たちの力で美しい富山に～」

4年生は、毎年、環境問題についての探究活動を継続している。10月下旬に実施している学習発表行事「学びのフェスティバル」では、これまでの発表をゴールとする形式から脱却し、子供たちの課題意識をより「自分ごと」にするための新たな実践を試みた。

① 中間発表形式を参加型のワークショップ形式に転換する

保護者を対象とした中間発表会では、従来の1回限りのプレゼンテーションではなく、10分間の発表を計3回繰り返し、聴衆を入れ替えながら何度も伝える形式を採用した。発表内容は、「地球温暖化クイズラリー」「ゴミ分別ビンゴ」「地球環



「エコ工作」体験のワークショップを開く

境すごろく「牛乳パックを用いたエコ工作」など、聴衆が体験を通して環境について学べるよう、教師から様々な発表形式を紹介し、子供たちが発表方法を選択しつつ、協働して工夫を凝らし内容や方法を作り上げていった。

この発表形式のねらいは、保護者の方々と直接交流し、共に活動する場面を作ることにより、発表を「学びの経過や軌跡を共有する場」として位置づけることにあった。子供たちは「お家の人と一緒に活動したい」「自分たちの調べたことをより多くの人に伝えたい」という主体的な願いをもって準備を進める姿につながった。



「ゴミ分別」のクイズラリーを開催する

① 参加型の発表形式から生まれた学び

実際の実践後、子供たちからは「家族の笑顔が見られ、私たちの学びからうれしい気持ちにつながったことが分かった」「やりがいを感じたので来年も頑張りたい」といった、手応えを感じる感想が多く寄せられた。中には「発表会であることを忘れるくらい楽しめた」という声もあり、当事者意識の向上が伺えた。

保護者アンケートからも、この試みに対し多くの肯定的な意見が得られた。「大人でも知らないことが多く勉強になった」「家庭でできる対策を一緒に考えたい」といった探究内容への評価に加え、「先生がいなくても自分たちで進める姿に成長を感じた」と、子供たちの自律的な姿勢や学び方についても好評を得た。

聴衆と対話する参加型の発表は、子供たちが学んだ知識を定着させるだけでなく、地域社会の一員として環境問題を解決しようとする主体的な意欲を深める貴重な機会となった。

(3) 5年生の取組「ともに生きる」

5年生は、「ともに生きる」というテーマのもと、福祉や防災を「自分ごと」として捉えて考えを更新したり、自分にできることを実践したりすることを目標に探究活動を展開した。本実践では、地域人材や専門機関との連携を単元構成の核とし、児童の意識変容を促すプロセスを重視した。

① 富山短期大学との連携

学びの大きな転換点となったのは、6月に実施した富山短期大学との連携授業である。ここで、介護の仕事の魅力を広報する課題に取り組み、人や社会がつながることの大切さを学ぶ学生らによる出前講座を受講した。10歳も年が離れていない学生たちの福祉に対する真摯な姿勢は、子供たちに強い衝撃を与えた。車椅子操作やユニバーサルデザイン(UD)食器の体験を通じ、学生たちが「利用者の『〇〇したい』という気持ちを支えることにやりがいがある」と



「介護体験」の出前授業を受ける

語る姿は、子供たちの福祉観を「大変で同情すべきもの」から「人の人生に深く関わるかっこいい仕事」へと劇的に変えた。自分たちに近い世代が福祉の未来を明るく語る姿に触れることで、子供たちの学び方はより主体的なものへと深化した。

② 地域や身近な高齢者とのかかわりの機会をもつ

この小単元後からは、「身近なお年寄りとの交流」を自らの探究を見つめ直す機会として位置付けた。当初、子供たちは「AI やロボットがあれば解決する」といった安易な解決策を導き出しがちになったところで、担任は、自分の祖父母や地域住民へのインタビューを活動に組み込んだ。

実際に「生の声」を聴く過程で、子供たちは足腰の痛みといった身体的課題だけでなく、友人との別れによる孤独感や、災害時の避難への切実な不安に直面した。この実体験が「今の自分の探究は本当に困っている人のためになっているか」を問い直すきっかけとなった。その後、呉羽地区社会福祉協議会と連携した「一人暮らし高齢者への励ましレター」の作成や、具体的で正確な「手作りハザードマップ」の制作へと探究を深める原動力となった。

地域という「ホンモノ」の教材、そして同じ呉羽に学ぶ短大生と共に学び、「少し先の未来の姿」に触れることで、子供たちが定義する「ともに生きる」は、「助け合い、差別をせず、一人一人が良

い気持ちになること」という、実感を伴う温かな言葉へと変容していった。



社会福祉協議会主催の「敬老の集い」に参加し、地域のお年寄りと関わる

(4)6年生の取組 教科横断による「ピクトグラム制作」と「ダンスフェスティバル」

① 学習のゴールを真正な形に設定する

6学年では、教科を横断して2つの総合単元を構成した。一つ目は「今、私たちにできること～ピクトグラムで、みんなが過ごしやすい呉羽小へ」の学習である。この単元では、学習の導入段階で、国語科の指導内容との連携を図り、ピクトグラムが「言葉の壁を超えて誰にでも伝わる」という特性を学んだ後に、子供たちは Google スライドを用いてのピクトグラムづくりに挑んだ。さらに、この学びをより価値あるものとするため、地元の印刷メーカーに協



ピクトグラム制作の様子



友達と表現を検討し合う

力を依頼し、子供たちが完成させたピクトグラムを耐久性のある美しいパネルとして制作した。将来に亘って掲示に耐えうる「本物のアウトプット」を用意したことは、子供たちが学習課題を「自分事」として捉える大きな契機となった。自分たちの作品が美しくパネル化され、校内に永続的に設置されるという見通しは、児童にとって社会とつながる真正な学びへと大きく結びついたと言える。



地元メーカーがパネル制作

児童の振り返りからは、「1年生に伝わった時が一番嬉しかった」「誰かのために安心を提供することの難しさと喜びを知った」といった声上がり、学習をやり遂げた達成感と、持続可能な社会の担い手としての自覚が育まれたことが確認できた。

② 地域人材を生かした「ダンスフェスティバル」の実現

2つ目は、「みんなで踊ろう!色とりどりのダンスフェスティバル」の実践である。これは、学年の教諭が自己表現が苦手な子供たちの個性を捉え、より個々の子供が仲間と協働しながら自己表現を楽しむ学習を構想しようと願い、体育科と音楽科、総合的な学習の時間を連携させた新単元を開発した。



ダンス講師に動きを学ぶ

創作ダンスを作り出す基礎の動きの講習と、子供たちが考えた創作の動きにアドバイスしてもらえ地域人材を発掘し、計3回のダンス講座を依頼した。プロの表現と的確なアドバイスに触れることで、児童は「伝えたい思い」を身体で表現する楽しさと難しさを学ぶことができた。「学びのフェスティバル」で参加した保護者からは「子供たちの話し合いや努力の軌跡が伝わり、成長を感じて感動した」「自分たちで作り上げる姿に、最高学年としての頼もしさを感じた」といった感想が寄せられ、学校と家庭が学びを共有する意味でも豊かな実践となったことが確かめられた。

3 まとめ

今年度は、地域の専門家や企業と連携し、梨の栽培や希少種の飼育、さらには校内のピクトグラム制作といった「本物の体験」を学習の核に据えて実践を進めた。地域人材を発掘し出会わせ方を工夫したことで、子供たちは課題を「自分ごと」として捉え、強い当事者意識をもって粘り強く探究に取り組むことができた。また、保護者向けの体験型ワークショップやパネル制作、「ダンスフェスティバル」等の、「誰かに伝える・届ける」場を設けたことが、学びを深める大きなきっかけとなった。さらに、地域の方の「生の声」を聴く活動を通して、自らのアイデアが本当に相手のためになっているかを問い直すなど、「自分ごと」としての文脈を伴った深い探究へとつながり、子供たちの大きな自信となったことは大きな成果と言える。

今後の課題としては、今年度取り組んだカリキュラム改善を継続していくことが挙げられる。その際は、小学校の6年間を通して、それぞれの学びがどのように接続し、積み重なっていくのかをさらに整理していきたい。地域との協力関係をより確かなものにするための仕組み作りも不可欠である。そして、地域連携による教育効果を学校全体として発揮し、末長く協力し合える体制を整えていくことで、持続可能な「ふるさと学習」の発展を目指していきたい。